

舞台裏から学ぶこと

渡 辺 護 *

当研究所に総務部長として着任してからはや一年になる。あっという間の一年であったというのが実感である。当研究所の機構は、総務部と4研究部から構成されており、したがって総務部の守備範囲は、組織の運営に係る事項とか、研究業務の全体的な企画・調整あるいは研究施設の設備といったことが中心となっている。即ち、一口でいえば、研究がスムーズに行なわれるよう舞台作りをすることにあるといっても過言ではあるまい。

まだ短い期間であるが、この舞台作りの一員として、研究部門との触れ合いの機会を多く持つこととなった。このなかで、新しい土木技術の向上を常に求めてやまない研究者の方々のひたむきな姿勢に接することができた。これは、いうなれば研究者の新しい創造への情熱とでもいうべきものであろう。この創造力というものは一体どこから生じてくるものなのか。それは、私が思うに、まるで幼子が初めて見るもの聞くものについて母親に「どうしてこうなの?」「なぜあなの?」と問いたすように、常に心のなかで現状に疑問詞「WHY」を持つことから芽ばえてくるものであろう。これがさらに、既成の通念に対してああでもない、こうでもないと様々な試行錯誤を通じて、やがてこれを克服しあるいは否定していくプロセスのなかで新しい創造の芽がたくましく育っていくように感じられる。

総務部という立場から言えば、規則の番人として、組織運営のルール範囲内に物事をおさめるのが責務であるという一面がある。これは、一見、上述した研究者の創造的な発想とは全く相入れない対立する行動様式であるといえよう。確かに、研究者がいま現在に在るものに

ただ妥協して満足するだけだったら、新しい進歩は生れてこない。

しからは、現実社会の営みのなかで活動している種々の組織の経営や運営といったものが、創造的でなくてもいいのか、単なる所与のルールの番人でさえあればいいのかというと、けっしてそうではあるまい。

総務部にあって常に頭を悩ますところは、全体的な調和とか公平とかいった総合的バランスをどのように計らうのかということである。たとえば、研究者が研究熱心のあまり職場の健康や安全の面で心配な点が生じていないのか、もしそういった点があるとしたらこれをどのように確保していくのか。一方では、高度に専門的な分野の研究向上に力を入れながら、他方では研究所全体としての研究目標をどのように達成していくのかという難しさである。

しかしながら、それにもまして、最も注視しなければならないことは、試験研究機関を取り巻く状況がめまぐるしくたえず変動してやまないという事実である。繰り返しの同じ場面が再度ありえない現実に対処するには、固定観念や従来の知識で答えを出してしまうのではなく、現状に反抗する精神がなければならぬ。新しい時代への問題意識を旺盛にしてこれに臨むとする以上は、組織の運営等に当る者も、研究者と同様に既存の通念を否定する発想をもたなくてはなるまい。そうしなければ新しい現実への挑戦は出来ないであろう。

現状に満足することなく、常により以上のものを求めていく意味で、研究者の方々から創造の源泉であるところの「NO」ということを学びたいものである。

*総務部長